

歴史家と/としての初期ギリシアの詩人

Early Greek Poets as/and Historians

デボラ・ボーデカー (ブラウン大学)

Deborah Boedeker (Brown University)

佐藤 昇訳

本稿は2013年3月29日大阪大学で行われた講演の翻訳である。講演者のDeborah Boedekerブラウン大学名誉教授は、夫Kurt Raaflaubブラウン大学名誉教授とともに来日し、東京大学、千葉商科大学、大阪大学で精力的に講演された。最新の研究成果を踏まえた刺激的な内容であり、質疑応答も熱を帯びたものともなった。彼女の研究上の関心は、主に前古典期、古典期の韻文、歴史叙述、宗教に向けられ、数多くの論文や著書を公にしている。本講演は、近年一層の隆盛を見せている歴史叙述研究に関するもので、最初期の歴史叙述（ヘロドトス、トゥキディデス）と、これに先行する初期ギリシアの韻文（詩や悲劇）との関わりなどについて議論が展開されている。幅広い史料に目を通し、最初期のギリシアにおける「歴史」の有り様を具体的に浮かび上がらせている。

紀元後2世紀に活躍したギリシアのルキアノスは実に多作な随筆家であり、小説家であり、風刺作家である。冴えを見せる随筆『歴史は如何に記述すべきか』の中で、彼は、明確に次のような発言をしている：

もしも歴史(ta historias)と詩(ta poietikes)を区別できない・・・人がいたりすれば、それは大変に、いやむしろとてつもなく酷いことである*。

ほとんど反論の余地がないように思われる。当然である。詩は歴史とは異なる。前者、ギリシア語のポイエシスは、単なる報告を指すのではなく、作者によって「作られた」ものであることを示している。他方、後者、ギリシア語のヒストリアは、「見る・知る」を意味する*wid-という語根に由来しており、その用法に「探求」「目撃」あるいは「判断」といった観念が表れている。少なくとも語源によれば、歴史と詩、2種類のディスクールは、別個の目的と手段を有しているはずである。

ルキアノスから遡ること5世紀、アリストテレスの考えも、視点は異なっていたが、同様であった。『詩学』で展開される有名な議論において、詩は、歴史に比べ「より哲学的で、より真剣である」と指摘されている。アリストテレスの見立てでは、詩人は偶然生じた個々の出来事を記録するのではなく、起きそうなこと、あるいは必然的に生ずることを表現しているが故に優れている（『詩学』1451a-b）。アリストテレスは、ポイエシスが作家の建設的、哲学的な思考を働かせるものであるが故に、文学として優れていると考えているのである。

* 訳注：古典からの引用は、筆者の意図を踏まえた上で、訳者が古典原文から訳出した。なお、韻文に関しては、詩であることが読者にイメージしやすいよう、適宜表現を工夫しており、その分やや正確さを犠牲にしているところもある。

歴史は、アリストテレスにとって、世の中の事実を叙述しようとするものである。これは、知的、倫理的な目標として、同等の価値を有するものではない。

しかし、アリストテレスより数十年前、最初期のギリシア人歴史家たちはどうだったのだろうか。彼らはこの問題について何か意見を表明していただろうか。ヘロドトスもトゥキュディデスも自分たちの方法論を、詩人のものとは区別していた。むしろ、彼らは自分たちの作品をアリストテレスよりも高く評価していた。それどころか、ルキアノス同様、彼ら歴史家たちは、詩の中で行われる説明が事実か否か、信憑性に疑義を表明している（傍点は原著者による、以下同）。例えば、ヘロドトスは、オケアノスという河の存在を疑っている（2巻23章）。大地の周りを流れているとされているこの河を、ヘロドトスは、誰か詩人が作り上げたものだと考えているのである——まるで詩人とはそうするものであるかのように。彼はまた、神々の系譜についても、ホメロス、そしてヘシオドスといった詩人たちが「作った」と主張している（2巻53章2節）。これは、ヘロドトスの時代から僅か数百年前のことに過ぎない。

ヘロドトスは、ホメロスの叙述に反論まで展開している。ギリシアの「過去」の中でも最も有名な事件、すなわち、トロイア王子パリスによるスパルタ王妃ヘレネ掠奪事件に関するものである。史家は、トロイア戦争の発端となったこの犯行に関して、詩人が採用したヴァージョンに異を唱えている。ホメロスによれば、ヘレネがパリスにトロイアへと連れ去られたことで、アカイア人〔ギリシア人〕はトロイアへと渡り、同市を包囲することになる。10年の後、彼らはこの強固な都市を陥落させ、住民を殺害し、あるいは隷属させた。メネラオスは妻ヘレネを取り戻し、故国に連れ帰ることになる。

ところが、ヘロドトスによれば、ヘレネはトロイアまでは行っていない。エジプトに辿り着くと、彼女はそこで保護され、トロイア戦争終結後に、スパルタ王メネラオスによって奪還されたのだという。ヘロドトスは、この話をエジプト人神官から耳にしたと述べており、そちらの方が詩人の物語よりも蓋然性が高いと考えたのである。もしもヘレネがトロイアにいたとすると、トロイア王プリアモスは、家族も都市も破壊されてしまうよりも、彼女を諦める方を選んでいたに相違ない、と考えたのだ。

ヘロドトスは、ホメロス版の叙述を、叙事詩の本質的な性質という観点から説明している。彼は、『イリアス』および『オデュッセイア』には、「エジプトのヘレネ」を承知していることを示す文言がいくつか含まれていると論じ、比較的穏当に、次のように結論づけている（2巻116章1節）：

私には、ホメロスもまたこちらの話を知っていたように思われる。しかし、彼が実際に用いた別の話と比べると、叙事詩作りにとっては、それほど見栄えがしない。それで意図的にそちらを外したのだ。

このようにヘロドトスは、人を楽しませるような物語を作ることを目的とはせず、自らを、真実を探求する著作家と位置づけているのである。

ヘロドトスよりも一世代若いトゥキュディデスは、やがて自らが一大書物を著すことになるペロポネソス戦争で、将軍職を経験している。彼は、アテナイの統制下にあった都市アンフィポリスをスパルタ軍の包囲から解放することに失敗し、20年間国外追放の憂き目に遭う。トゥキュディデスの書物は、同時代史を綴った最初の大著なのである。

トゥキュディデスは、ヘロドトス以上に、過去を正確に表現するという自らの目的にこだわっていた。それでもなお、遙か昔のことについては、『イリアス』を元にして、情報を推定している。例えば、どれほどの軍勢がギリシアからトロイアまで渡ったのか。トゥキュディデスは、ホメロスが詠っている船の乗員数について、その最大値と最小値から中間値を導き、これにホメロスが伝える船舶数を積算して推定値を出している。もっとも「ホメロスは詩人だから、誇張していそうだが」と但し書きをしてはいるのだが（1巻10章3-5節）。別の箇所（1巻21章1節）でトゥキュディデスは次のように主張している：

以上に言及した証拠に基づいて、事態が、およそ私が叙述してきたようなものであったと思ったとして、過ちにはなるまい。また、詩人たちはそれらについて仰々しく飾り立てて謳っていたが、それを信じることなく、...

程度は様々であるが、いずれの歴史家も、自分たちの作品は調査が行き届いており、信憑性が高いあるいは正確であって、先行する詩人たちと比較して、より信頼できるものとしている。それぞれ、自分の戦争の方がトロイア戦争以上に大規模であるとすら主張している（ヘロドトス7巻10章2節、トゥキュディデス1巻1章、1巻10章3-4節）。すなわち、方法論ばかりか、主題までもがホメロスに優っているというわけだ。しかし、史書が詩とは別個のものであり、優っているとはいうものの、いずれの作品もかなりの程度、ホメロスの叙事詩、そして彼らに先行するさまざまな詩によって形作られている。この問題を検討する前に、初期ギリシア（およそ前750年～前450年）の「歴史」詩について手短かに概観しておきたい。続いて、それらがヘロドトス、トゥキュディデスに如何なる影響を及ぼしたのか考察する。最後に、散文、韻文を問わず、ギリシア人の過去語り共通すると思われる、非常に大きな特徴を3点示すこととする。

いうまでもなく、過去について語ることは、詩の専売特許ではない。過去の出来事についての説明は、記憶されたものにせよ、想像されたものにせよ、きっと普通の話の中で伝えられていただろう：祖父は戦時に何をしていたのか、あるいはご先祖さまが何故この地に移住してきたのか、といった形で。しかし、それに加えて、ヘロドトスやトゥキュディデスが登場するまでの数世紀の間は、専門家たちが過去の事績を詩にしていた（この他、神々への讃辞、倫理的、実践的助言、軍事的鼓舞、個人的経験などトピックは他に多岐に亘っているが）。その作品を特徴付けるのは、通常の話し方とは異なる言葉遣いと韻律であった。彼らは詩を公開し、あるいは合唱隊が公にするよう訓練した。また他の機会に再演されることも有りえた（同一人物によるのか、別人によるのかは分からな

いが、何かしらの変更はきっとあっただろう)。吟遊詩人のおかげで、あるいは国際的な祝祭で公演されることにより、広く知られることになった詩もある。

詩の文言が書き留められることもありえた。およそ前800年頃、アルファベットがギリシアに導入された後、確かに文字化されたものもあった。しかしながら、少なくとも前5世紀を通じて、大抵のギリシア人は通常、文字で書かれた詩よりもむしろ生で詠われた詩に触れていたことだろう。宗教的祝祭で、あるいは音楽の競演で、それからもっと非公式の集まりで。とりわけ饗宴シユンボシオン、すなわち葡萄酒を酌み交わすエリート男性の宴では、演芸的なものが披露され、ときに参加者自身が歌を披露することもあった。

これら過去に関する詩の中で最も重要なのは、もちろんホメロスの叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』である。両者は、口誦詩の長い伝統の中で発展し、前700年頃に現在の形に整えられた。そして、その後何世紀にも亘って、広範なギリシア人に共通の文化遺産と感じられていた。フランソワ・アルトーフ François Hartog はトロイア戦争こそ、ギリシアのあらゆる歴史を「産み出す母胎」であったとすら主張している¹。

現在、私たちの目からすれば、『イリアス』および『オデュッセイア』が扱う主題は、歴史というよりも、むしろはるかに神話的である。しかしながら、両者が想定する聴衆にとって、これらの叙事詩は、彼らの過去の出来事を叙述しているのである。現在とは際だって異なる過去を。大抵の出来事は現実にある地理的空間で繰り広げられるのだが、叙事詩人は、遙か昔の「英雄の」社会を描き出している。英雄たちは、鉄ではなく、青銅の武具をまとっている。彼らは神の子なのかもしれない。同時代の男たちよりも逞しい。しかし多くの点で、現実的であり、理解もできる。例えば、民会のような、ギリシアのポリス（都市国家）に典型的な、実際に存在した制度は、カート・ラーフラウプ Kurt Raaflaub が論じているように、叙事詩の形が整えられた頃に姿を現したものであり、それらの存在を詩の背景に見て取ることができる。そこでは、必然的に、そして気づかぬうちに、時間の経過とともにいくつかの要素が「アップデート」されていた。しかしながら、詩の前景では、古式ゆかしい王と王宮に焦点が合わされている。ある部分は後期青銅器時代から伝わる伝承の中で記憶され（そして後代にまで遺された、視覚に訴える遺物によって強化され）てきたものであるが、想像の部分もある。

これらの叙事詩に詠われた過去は、幾つかの層を為している。ホメロスの描く登場人物たちは、（彼らにとっての）過去の出来事を口にしてはいるが、それと同時に、やがて状況が変化することも承知している。好例はトロイアの王子ヘクトルである。彼は、不吉にも、自らの都市がやがて消え去ってしまうことを予見する（『イリアス』6歌447-449行）：

それというのも私は、しかと心得ているのです。頭でも、心でも。

¹ F. Hartog, “The Invention of History: The Pre-history of a Concept from Homer to Herodotus,” *History and Theory* 39 (October 2000), 384-395, esp. 384, 388ff.

聖なる街イリオス [=トロイア] が、プリアモスが、
トネリコの槍持つプリアモスの民がいつか滅びる、日が来ることを。

ヨナス・グレートライン Jonas Grethlein が強調しているように、ホメロスの歴史的な感性により、出来事は時間軸に沿って謳われているが、そればかりか、諸要素のネットワークに結びつけられている。詩人は、ときに登場人物の動機と計画をドラマティックなものにすることで、過去と現在の複雑な関係を描き出している。聴衆はおのずと、過去の出来事とそれに対する反応が、新しい行動にいかにか繋がっているのか、耳にすることになる。例えば、アキレウスは、一度放棄した戦場に戻ろうと決意する。それはヘクトル成敗のためであり、ヘクトルによって殺された親友パトロクロスの復讐を果たすためであった（『イリアス』18歌88-116行）。このように過去の出来事と結びつけることこそ、散文史家ヘロドトスとトゥキュディデスが採用することになる、様々な特徴の一つなのである。

ヘロドトス以前、過去を扱った文学作品は、他にも数多く流通していた。そのうちのほとんどが、今ではごく短い断片、あるいは要約の形でしか伝わっていない。トロイア戦争の中でも、ホメロスが扱っていない伝承を謳った短めの叙事詩もあれば、同戦争よりもさらに古い時代に設定されている神話（オイディプスとテーバイの物語、アルゴ船の航海、ヘラクレスの偉業など）を詠ったものもある。中でもとりわけ興味深いのは、ヘシオドスに帰される『女のカタログ』である。今や断片でしか伝わらないこの作品は、神の子を身ごもった女性たちについて、短い説明を含んでいるのだが、あちらこちらに子孫に関する話もちりばめられている。『イリアス』や『オデュッセイア』に較べれば、演説もほとんどなく、語りも単純で、ホメロスの叙事詩より、劇的でもなければ、歴史的な出来事の真実味にもあまり関心が向けられていない。しかし『女のカタログ』は、幅広い聴衆に向けて、多くの家、多くの共同体の「英雄的な過去」を提供していたのである。他にも「歴史」的な内容を含む韻文が、初期ギリシアには存在していた。それらは、語り手がほとんど登場しない叙事詩とは対照的に、個々の詩人自身が生き活きとしたペルソナ（語り手）として登場するため、しばしば「私的抒情詩 personal lyric」と呼ばれている。またこれらの作品群は、叙事詩の荘重な形式、六脚韻詩ヘクサメトロスの形式ではなく、エレゲイアの連句や短いスタンザなど様々な韻律を用いて、弦楽器リュラの演奏に合わせて歌うように作られている。残念ながら、初期ギリシアの抒情詩やエレゲイアは、今やほとんどが断片で伝わるのみだが、近年発見されたサッフォーの歌のように、今なお、パピルスの巻物（古代世界の本）の断片から復元されているものもある。

前7-6世紀、実に様々な地域が著名な抒情詩人、エレゲイア詩人を輩出している。パロス島のアルキロコス、スパルタのテュルタイオス、コロフォンのミムネルモス、レスボス島のアルカイオスとサッフォー、メガラのアテグニス、そしてアテナイのソロン。いずれの詩人も、間接的にであれ、それぞれの共同体の歴史に言及している。

これらの詩人が詠い、喚起する過去は、様々な用途に用いられる。同時代の聴衆にとって見倣うべき手本を示すこともできた。おそらくミムネルモス（前640年頃）が、リュディア人と激しく戦った自国のある兵士を謳っているのは、こうした理由があったためだろう（ウェスト編断片14番1-8行）。

かの者の、力も、心の雄々しさも、それしきの〔諸君ら程度の？*〕
ものにはあらず。先達たちから聞き及ぶ。彼らは見たり、かの者が
緊密なリュディアの騎兵の戦列を、四散せしめしところをば。
ヘルモスの野にて槍をば振るう人。
パラス・アテネは一度とて、一切難じたことはなし、
彼の心の激しき力を。先陣に立ち、
血みどろの闘いの中、疾駆する、
敵意もて、厳しい矢雨を打ち破りし時。

他に、政治あるいは戦争における共同体の奮闘を称えたものがある。テュルタイオスのものである（前640年頃）。同胞スパルタ人に語りかけるようにして、詩人が言祝いでいるのは、スパルタによる沃野メッセニアの征服である（ウェスト編断片5番4-8行）。

かの地をめぐる戦いを、彼らは続け、十九年。
鉄の意志もて、何時も休むことなく。
槍もつ兵は、我らが父の、父君なり。
明くる年、奴らは沃野を打ち捨てて、
イトメの高き山から逃げ去りぬ。

詩人は、彼ら自身が生きる時代について語る際、トロイア戦争、あるいはその他の神話時代の「歴史」から類似の例を引くこともできた。レスボス島のサッフオー（前6世紀初め。なにがしかの作品が現代まで伝わる唯一の女性詩人である）が詠ういくつかの詩にその事例が確認できる。例えば、断片17で彼女は、次のような故事を想起している。ギリシア勢を率いるアガメムノンとメネラオスが、トロイアからの帰途、レスボスに立ち寄るも、風で立ち往生。女神ヘラに祈願してようやく故郷へと漕ぎ出す——この女神こそ、話者自身が救いを求めている相手なのである（どのようなことなのかは不明である）。ことによると、女性詩人サッフオーと戦士アガメムノン、メネラオスとの並行関係は、アイロニカルなものなのかもしれない。

*訳註：筆者は τοῖον を“such [as yours?]”と英訳し、この詩句が同時代の聴衆に向けられたものである可能性を示唆している。

またサッフォーは有名な断片16で、世にも名高いヘレネのパリスへの愛を巧みに利用し、誰もが（詩人自身を含め）エロスに突き動かされることを示している（断片16番1-12行）。

ある者は、騎兵部隊、ある者は、歩兵部隊、
またある者は、艦隊が、か黒き大地のその上で、
何に劣らず美しい、そう唱えはするのだが、
私は言おう、何であれ人が愛するものならば、それが至上の美しさと。
いと容易し、誰もが皆にこのことを、
得心させることなどは。それというのも、美において
如何なる人をも寄せ付けぬ、ヘレネととも、
素晴らしき夫君をうち捨てて、トロイアへと渡りけり。
子供らも、愛する両親のことすらも、
努々想うこともなし。〔エロスが〕彼女を誘いて、...

サッフォーと同じ時代を生きた、レスボス島の詩人アルカイオスには、自国ミュティレネで生じた党派争いを反映し、彼自身の亡命に言及した、興味深い断片がある。この詩人は、アテナイとの戦いで楯を失ったことも詩にしている（断片428 LP. これはとても自慢するようなことではない！）。ローマ帝国初代皇帝アウグストゥスの時代、地誌家ストラボンが、アルカイオスがこの知らせを告げる為、自国に使節を送ったと記しているが、とても信じられることではない。

アルカイオスは無事 [...テキスト破損...] / 眼光輝くアテナ、女神の社に、アッティカの者らが〔彼の楯を？〕掲げし。

何世代も後、ヘロドトスがこの詩に言及している。トロイアの近く、シゲイオンの支配をめぐるアテナイ・ミュティレネ間の戦争について述べる段でのことである（5巻95章）。

彼らが干戈を交える間、この戦にはじつにさまざまな出来事が生じたが、そのうちに次のようなことがある。遭遇戦となり、アテナイ勢が優勢となると、詩人アルカイオスは逃げだし、本人は逃げおおせるものの、楯はアテナイ人によって押さえられた。彼らはそれをシゲイオンのアテナ神殿に掲げた。

ここで我々は、詩に詠まれた「歴史」の変容を見ているのかもしれない。おそらくそもそもは、ミュティレネにいるアルカイオスの仲間集団にとっては自虐的な冗談であっただろう。それが後代、ギリシア中にいるヘロドトスの読者にとっては歴史的事実となっているのである。

詩人自身の誇らしい偉業が主題となることもある。賢人ソロンに帰されるエレゲイア詩がその例である。前590年頃、政治不安のアテナイを率いたこの人物

は、自らが実施した政治経済改革について要約している（ウェスト編断片36）。断片5では、民衆と富者、いずれに偏向することもなかったと述べ、次のように結論づけている（ウェスト編断片5番5-6行）：

双方に頼もしき楯めぐらして、我は立てり。
いずれにも不正な勝利を許さざりけり。

また地方祝祭、すなわち私的な祝宴ほどには親密でない場で公演するために作られたと考えられる、長い「歴史」詩の痕跡も残されている。繰り返し登場する主題は都市創建譚である。とりわけイオニア、北アフリカ、シチリアのような、ギリシア本土からの移民たちが居住していた場所で頻出している²。『スミュルネイス』と呼ばれるミュネルモスの失われたエレゲイア詩は、おそらくスミュルネイスという名のアマゾン族の女性によってスミュルナ（現在のトルコ共和国イズミール）が建設されたことを詠っているのだろう³。またハリカルナッソスの詩人パニューアッシスに帰される、イオニア諸都市の創建を謳った六脚韻詩は、7,000行にも及んだという——興味深いことに、彼はヘロドトスよりも年長で親類関係にある。さらにいっそう遡ると、詳細不明の詩人エウメロスがおり、彼はコリントスの起源に関わる叙事詩を作ったとされている⁴。

都市建国譚は、独唱歌ではなく、合唱隊の歌と踊りのための詩に詠われることもある。合唱隊歌には様々な形式があるが、とりわけ興味深い（そして残存状況が最も良い）のは、祝勝歌、もしくは「エピニキア」と呼ばれるものである。オリュンピア、ピュティア、その他大規模な競技祭で優勝した人物を称えるため、詩人は、十分な対価と交換にこうした詩の製作を依頼された。

例えば、ヘロドトスの幾分年長の同時代人にピンダロスがいる。彼は3つの異なるエピニキアの中で、リビュア地方の都市キュレネの創建について詳述している。いずれも同市出身の選手を称えるものである。『ピュティア第9歌』1-70行では、アポロン神がラピタイ族の王女キュレネに恋い焦がれ、リビュアに連れ去り、女王に据えたとされている。『ピュティア第4歌』1-57行では、悪名高いメディアが、船上でイアソンとアルゴ船の乗組員たちに予言を告げている。17世代の後、彼らの末裔から、リビュアへと移民団を導く者が現れよう、と。『ピュティア第5歌』55-95行では、テラ島のバットスが、アポロンの祝福を受けてその都市を建設したと詠われる。このように神話化された歴史は、新たな

² 初期ギリシアにおいて建国譚が独立したジャンルを成していたのか否か、はっきりしたことは分からない。C. Dougherty, *The Poetics of Colonization: From City to Text in Archaic Greece* (Oxford, 1993) 84 も参照。ただし同書はエレゲイア詩よりも抒情詩に焦点を合わせている。

³ E. L. Bowie, “Early Greek Elegy, Symposium and Public Festival,” *JHS* 106 (1986) 28-29.

⁴ 前7-前5世紀にかけての歴史詩について、概要はJ. Marincola, “Herodotus and the Poetry of the Past,” in C. Dewald and J. Marincola (eds) *Cambridge Companion to Herodotus* (Cambridge, 2006) 25を参照。

都市の誕生について、神に端を発する起源やその後の変転は勿論のこと、人的損失すら示唆することもあり、聴衆には過去に深い意味を見いだすことになる。現存するピンダロス祝勝歌46編には、ほとんど全てに「歴史的」な素材が含まれており、しかも建国神話ばかりとは限らない⁵。優勝選手を称える中で、詩人はその人物の家の歴史に目を向けることもある。とりわけ先祖が以前の大会で優勝している場合には。また彼は、しばしば人間と神との間に生じた過去の物語から、教訓を引き出している。これは、ピンダロスの少し先輩であり、ライバルでもあるバッキュリデスにも当てはまる。彼の祝勝歌は現在では断片でしか残っていないが、なかでも最も有名なのは、リュディア王クロイソス（前560-前546。ヘロドトスの『歴史』でも有名な人物として登場する）に関するものである。自らの統べる街が陥落し、王、そして一族が火刑に処されようとするその瞬間、奇跡的に救済される、その場面を詠っている。一番興奮を覚えるのは次の箇所だ（第3祝勝歌35-66行抜粋）：

両の手を高々と天に差しのぼし、
 彼の人 [=クロイソス] が、大音声でかく語りぬ「力では抗えぬ力をもつ神よ、
 神々の恵みは何処。レトが御子なる、主は何処にや。
 アリュアッテスが屋敷は崩れ去る。...
 かつて忌みしものも今は愛し。死はなにより甘美。」
 そう言って、彼の人命ぜり。足どり柔き従僕に、薪の山に火を放てと。...
 だがしかし、恐ろしき炎の輝くその力、襲いくる、まさにその時、
 神ゼウス、黒き雨雲もたらして、黄金の炎かき消しはじめる。...
 しかる後、デロス生まれのアポロンが、
 老翁 [=クロイソス] を運ぶ、ヒュペルボレオイのところまで...
 敬神の故。いと聖きピュト [=デルフォイのアポロンの神域] に対して、
 人のうち、誰に劣らず奉納を贈っていたが故にこそ。
 ヘラス [=ギリシア] に住まう者ならば、一人とていはしまい。
 世に聞こえしヒエロンよ、
 彼 [=クロイソス] こそが、ロクシアス [=アポロン] に黄金を、
 其方よりも盛大に、捧げたなどと言おう者は。

アポロンはクロイソスを「北風の向こうの人々（ヒュペルボレオイ）」のところに連れていった。この神話化された歴史は、クロイソスのごとく、盛大な奉納物を捧げた人間に、神が如何に恩寵を垂れるのか、明らかにしている——この道德観を、ピンダロスはすぐさま、シュラクサイの僭主ヒエロンを称える祝

⁵ ピンダロスの歴史的な語り（ナラティヴ）については S. Hornblower, *Thucydides and Pindar* (Oxford, 2004) esp. ch. 4、及び J. Grethlein, *The Greeks and their Past: Poetry, Oratory and History in the Fifth Century BCE* (Oxford, 2012) ch. 2. ピンダロスの謳う過去とヘロドトスが記す過去の交錯については、G. Nagy, *Pindar's Homer: The Lyric Possession of An Epic Past* (London & Baltimore 1990) 215-338を参照。

勝歌に利用している。詩人が同時代人に向けて口にする称賛や助言に、過去からの教訓が、特別な意味を与えるのである。

同時代史が賛歌に詠まれることもある。ピンダロスの作品には、ペルシア軍のギリシア進攻を見事退けた人々を称賛するものがある。たとえば、アイギナ島出身の運動選手を称える祝勝歌では、アイギナの伝説的英雄がうち立てた偉業を詠っているが、やがて話題は、先のサラミス海戦で同島がいかに活躍したかに移っていく（『イストミア第5歌』47-50行）。

今もまた、戦場で、アイアスの都市サラミスが証言しよう、
船乗りたちに救われしこと。ゼウスがもたらす破滅の嵐、数多の男の血の雹
の中で。

ピンダロスは別の箇所でも、ペルシア戦争で活躍した、他のギリシア諸都市を賞賛している⁶。この詩人の場合、ホメロスや後の歴史家のように、戦闘場面を描くことは一切なかった。その代わりに、最近の出来事を、知っている聴衆に向けてそれとなく仄めかすのである。おそらく、生上演の特徴なのであろう。

20年ほど前、ペルシア戦争を詠う詩が劇的に追加された。オックスフォード大学のパピルス学者ピーター・パーソンズによって公開された、オクシュリュンコス出土のあるパピルスには、シモニデスがエレゲイア調で詠う、祝賀の詩の一部が記されていた。シモニデスは5世紀初めの著名な詩人であるが、作品のほとんどは現在に伝わっていない⁷。この「シモニデス新断片」は、前479年、スパルタ率いるギリシア連合軍が、ペルシアの軍勢に決定的勝利を収めた、プラタイアイの戦いを記念しているものであった⁸。この戦闘から数年後、シモニデスは大胆にも、これをトロイアにおける原型的な勝利に準えている（*P.Oxy.* 3965、ウェスト編2巻断片11番13-27行。ただし校訂者のウェストがパピルスの欠損部分を相当程度補っている）。

歌に詠まれし都市落とし、国許へと帰還する、

⁶ ピンダロス『ピュティア第1歌』72-80行は、僭主を言祝ぐ祝勝歌としてシュラクサイに焦点を合わせているが、アテナイやスパルタにも好意的に言及している。また別の断片では（断片76-77 S-M）、前480年に行われたアルテミシオンの戦いにおけるアテナイの活躍を称えているが、これはディテュランボス（男性合唱隊のための物語的抒情詩）の一節とされている。『パイアン第2歌』59-65行では、アブデラの人々が、ペルシア人ではなく、トラキアのパイオニア人を倒したことに賛辞を送っている。

⁷ P. J. Parsons (ed) “3965: Simonides, Elegies,” in *The Oxyrhynchus Papyri* 49 (1992), 4-50. 同時に、Simonides fr. 10-24としてM. L. West, *Elegi et Iambi Graeci*, vol. 2 (Oxford, 1992, 2nd ed.)に収録された。

⁸ 歴史詩としての「シモニデス新断片」をめぐる議論については、M. L. West, “Simonides Redivivus,” *ZPE* 98 (1993), 1-14; E. L. Bowie, ‘Ancestors of Historiography in Early Greek Elegiac and Iambic Poetry?’ in N. Luraghi, *Historian’s Craft in the age of Herodotus*, (Oxford 2001), 44-66; D. Boedeker and D. Sider (eds) *The New Simonides: Contexts of Praise and Desire* (Oxford 2001) 収録の諸論考も参照。

英雄の中でもひとときわ勲しく、^{つわもの}兵率いしダナオイ人。
彼らには、かの御仁〔＝ホメロス〕の力にて、不朽の誉れ、注がれぬ。
彼こそは、スマレ色した編み髪ののピエリアなるムーサイに、あらゆるまこと眞実を
授けられ、後の世に、命短き半神の族の名をば知らしめけり。
だが今は、名高き女神のご子息よ、ごきげんよう、
海の神ネーレウスが娘のご子息よ〔＝アキレウス〕。
だが私は、数多の名をもつムーサ様、貴方を呼ぼう、助太刀に、
祈りを捧げる人間に、貴方が心を砕くなら。
甘美なるこの飾り、我が歌にもまた、授け給え。
後の世で、彼らのことを、誰かまた、想う者があるように。
その者ら、スパルタのため、ヘラスのために、
隷属の日など見る者なきように、護り手となり、妨げた。
勲しを忘れざりけり、...

ホメロスが女神ムーサたちを通じてトロイア攻略の英雄たちに不朽の榮譽をもたらしただけでなく、この詩人も、プラタイアイに進軍したスパルタ人に名声をもたらし助けとなるよう、ムーサに祈願している。他にもペルシア戦争中の出来事に言及した、ヘロドトス以前の詩がある。シモニデスは、プラタイアイの戦い以外の戦闘についても詠っている⁹。テルモピュライに斃れた300人のスパルタ兵を詠んだ抒情詩の一部が遺されている（『ギリシア抒情詩集PMG』断片531番2-3行）。

テルモピュライに斃れし者の／幸運(tyche)は名高く、死のさだめ(potmos)は麗わし。／彼らが墓標は祭壇。慟哭の代わりに記念。憐れみは賞賛。

ペルシアと闘ったギリシア諸都市に対してピンダロスが讃辞を送ったのと同じように、この詩もまた、過去の行為について、それを叙述するのではなく、称賛することで記念している。この同じスパルタ人戦没者の為に作られた、有名な墓碑銘も伝わっている。まるで死せる戦士自らが、通り過ぎる者に語りかけているかのよう：

行く人よ、ラケダイモン〔＝スパルタ〕人に伝えてよ。彼らが言葉に従いて、我ら眠る、この場所に、と。

さて、前5世紀の主要な韻文様式で、常に過去を再構成していたものが、まだ一つある。悲劇である。これは上述の諸様式とは異なり、ドラマティックに、語り手を介在させずに再構成する。過去の出来事が、観衆の眼前であたかも「生

⁹ See I. Rutherford, "The New Simonides: Towards a Commentary" in D. Boedeker and D. Sider (eds) *The New Simonides: Contexts of Praise and Desire* (Oxford 2001), 35-38.

で」繰り広げられているかのように。こうした特徴により、悲劇には、過去を扱う韻文の中でも特別の地位が与えられる——これはあまりに広範に亘るトピックであり、このことだけで、別の独立した講演をしなければならないだろう。

ここでは一つだけ、「シモニデス新断片」同様、記念詩 *ποίησις of commemoration* というものに目を向けさせてくれる、いささか変わった劇に焦点を合わせたい。概して、悲劇というものは「英雄時代」の過去を扱っており、舞台は、ディオニュシア祭で観劇しているアテナイ人の世界、民主政の時代からは遠く隔たっている。しかし、僅かに、初期の実験的な悲劇には、神話時代の過去ではなく、比較的最近の出来事、ペルシア戦争に取材しているものもある。

このうちの一つが現存している。アイスキュロスの『ペルシア人』である（前472年上演）。遡ること8年前、アテナイをはじめとするギリシア方が海上でペルシア軍勢を破った、サラミスの海戦が扱われている。アイスキュロスは、ペルシア王クセルクセスの宮廷が敗戦の報を耳にするところから、すなわち、この宮廷の視点から劇を展開させている。詩人は敵を人間的に扱っている。悲劇に登場する他の英雄同様、クセルクセスは、自らの、あまりの驕慢（ヒュブリス）がひきおこした災厄を受け入れねばならない。作品には、このような人間の苦しみに対する感性と、ギリシアの誇りとが十二分に織り合わされている。観衆の意識は、強大な艦隊を破ったギリシア勢の驚嘆すべき勝利に向けられ、アテナイの指導力が光り輝く。（ペルシアへの「隷従」と対置される）政治的自由という新しい観念、そして（ペルシアの贅沢と感情の激しさに対置される）ギリシアの慎ましさが定式化されているのは、明らかである。

「シモニデス新断片」同様、『ペルシア人』の場合も、最近の出来事が、伝統的な韻文形式で表現され、別のレベルに引き上げられている。すなわち、同時代の営みが、古の英雄たちの行動に準えられ、そのすぐ後ろに神の恩寵と正義の力を感じることができるのである。こうした作品は、基本的には、観衆に、「何が実際に起こったのか」を知らせている訳ではなく、価値のある、反響が生まれるような過去を創り出すよう、手助けをしているのである。

このように概観してみると、ヘロドトスやトゥキュディデス以前の「歴史詩」が持っていた拮据に思い至る。英雄叙事詩の伝統に始まり、アルカイオスの作品のような、自己の回想、運動や軍事などの、人間の功績に対する称賛。目的や効果はいくつもある。中でも共同体のアイデンティティは重要で、人間の有り様に対する思索というのも劣らずに重要であろう。言うまでもなく、歴史詩が主に焦点を合わせているのは、過去の正確な再構築ではなかつた——しかし、散文で記された歴史が登場するまで、ほとんどのギリシア人は昔日の出来事をこのようにして「知って」いたのである。

そこで、最初期の歴史家に対する歴史詩の影響についていくらか考えてみたい。ホメロスの叙事詩の中心的な部分は、ヘロドトスの『歴史』にもトゥキュディデスの『戦史』にも現れている。戦場に実際にいる者たちを描き出す模倣

的なmimetic叙述、登場人物描写と状況説明が織り込まれた構成、そして（とりわけヘロドトスで顕著なのが）扱う地理および民族の広がり。直接話法が人間の計画、イデオロギー、そして感情を浮き彫りにする。人間が行為主体であることを強調することで、事件を思わぬ方向に展開させる不可視の要素（詩の場合にはしばしば神の姿で表わされ、歴史の場合には大抵運命若しくは幸運、テューケーとなる）と釣り合いをとらせる。登場人物は、非難が加えられることもあるが、一定度の権威をもって扱われる。語りは、人間の行動が一定の型にはまっていることを強調している。「英雄的」行動がしばしば度を超してしまうこと、成功の儂さもこうした型に含まれる。このことは悲劇にもかなりの程度、当てはまる。こちらは、不和と危機の瞬間に焦点が合わされている。悲劇の中の行動や登場人物の型（パターン）、とくに重要人物の盛衰と彼らの悲痛な現実認識、これらはトゥキュディデスにも、ヘロドトスにも見出される。前者については早くから指摘されており、少なくとも、皇帝アウグストゥスの時代、ハリカルナッソスのディオニュシオスにまで遡る（『トゥキュディデス』15）。また、話者の信憑性に関しても、重要な影響があった。ヘロドトス、そしてとりわけトゥキュディデスに関しては、先に見たように、地の文の語り手が、自らの権威付けに関心を抱き、しばしば信用ならない詩人と対比していた。しかし叙事詩においてもまた、真実を述べているか否かの問題は生じており、これがある意味、散文歴史家にも影響を与えていたと考えられる。『イリアス』を詠った詩人は、もちろん、ゼウスと記憶の女神の娘、ムーサにすがって、その助力を得て詠い始めているが、さらに後にはムーサイに「そちらにおわしまして、万事ご承知の女神たちよ」と呼びかけ、彼自身では知り得ないような、例えばトロイアに参戦した全ての部隊などといった、ことの詳細について教えてを乞うている（2歌484-492行）。『オデュッセイア』でも、記憶のムーサは登場するが、それとはまた異なる、情報の確度、あるいは真実味に関する思考を見出すことができる。トロイアからの長い帰途、オデュッセウスはフェニキアの吟遊詩人デモドコスの詩を耳にする。それは、オデュッセウス自らが数年前トロイアで目撃した出来事を詠ったものであった。オデュッセウスは次のように賛辞を述べる（8歌487-491行）：

デモドコス、私はそなたを、人間の誰よりも高く讃える。
 ゼウスの娘、ムーサがそなたに教えたか、さもなければアポロンが。
 何となれば、そなたは詠う、アカイア人の命運を、あまりにもきっちりと。
 アカイア人が成せること、被（こうむ）りしこと、苦しみしこと。
 あたかもそなたがその場所に、自ら居合わせたかの如く、
 さもなくば、居合わせた他の者から聞き知ったが如くに。

オデュッセウスは謳われていた出来事を目撃していたのであるから、その賞賛は、このフェニキア人歌手の物語に、叙事詩の他の部分以上に、信憑性を与えていることになる。しかし同時に、叙事詩そのものの語り手が「きちんとや

っている」かどうかについて、博識な聴衆にとっても、きわめて鋭い問題が提起されているのだ。ハンナ・アーレントは、まさにこの一節こそ西洋に於ける歴史の始まりを告げていると提案している¹⁰。

歴史家は、とりわけ古い時代の出来事について、叙事詩が唯一の情報源であることもあり、詩的な語りを歴史史料として用いることもある¹¹。先に触れたように、トゥキュディデスはトロイア戦争について、ホメロスの説明を利用しつつ、しかし懐疑的であった。叙事詩が、歴史家の叙述に影響を与えた、唯一のジャンルだったという訳ではない。私は別のところで、プラタイアイの戦い（前479年）に関するシモニデスのエレゲイア詩が、同じ戦いを報告しているヘロドトスの情報源になっていると論じたことがある¹²。ヘロドトスには、他にも同じような事例がある。彼は、リュディア人が話したという物語を繰り返し、クロイソス王の最期を語る。陥落した都市の中、燃え盛る薪の上で、今まさに王が死を迎えようとするその瞬間、奇跡的なことに、突然の激しい雷雨が燃え盛る炎をかき消した（1巻86-87章）。上述のように、数十年前、バッキュリデスは同じ物語を詩に詠っている。そちらでは、クロイソスが火刑を逃れた後、神話上の人々ヒュペルボレオイのもとに連れられていくことになっている。ヘロドトスがバッキュリデスの詩を情報源の一つとしているならば、歴史家はこれを、より「現実的な」精神をもって変更していることになる¹³。

クセルクセスの進軍並びにサラミスの戦いに関するヘロドトスの叙述に、アイスキュロス『ペルシア人』が及ぼした影響は明白である。同海戦が行われたのが前480年、劇の上演はそれから8年と経っていない。言葉の面でも、主題の面でも、影響を見て取ることができ、ヘロドトスがこの劇をよく知っていたことが分かる。例えば、彼は、アイスキュロス同様、ギリシア人のペルシア臣従について「奴隷の枷」という印象的なイメージを利用している。

アイスキュロス『ペルシア人』49-50行、クセルクセス軍の一覧より：

いと聖きトモロス山の近隣に住まう者らが約束するは、
ヘラス（＝ギリシア）に奴隷の枷をかけること。

ヘロドトス7巻8章γ節（クセルクセスが侵攻作戦の大いなる野望を説明する）

¹⁰ H. Arendt, *Between Past and Future* (New York, 1954), 45.

¹¹ ギリシアでは韻文及び歴史叙述がともに典型的な歴史史料（情報源）となっていたこと、そして歴史家にとって詩人が情報源であったことについては、H.-J. Gehrke, "Myth, History, and Collective Identity: Uses of the Past in Ancient Greece and Beyond," in N. Luraghi (ed) *The Historian's Craft in the Age of Herodotus* (Oxford 2001), 282-313, at pp. 298-9を参照。

¹² D. Boedeker, "Heroic Historiography: Simonides and Herodotus on Plataea," in D. Boedeker and D. Sider (eds) *The New Simonides: Contexts of Praise and Desire* (Oxford 2001), 120-134.

¹³ Ch. Segal, "Croesus on the Pyre: Herodotus and Bacchylides," *Wiener Studien* 84 (1971), 39-51; G. Crane, "The prosperity of tyrants: Bacchylides, Herodotus, and the contest for legitimacy," *Arethusa* 29 (1996), 57-85.

すなわち、太陽は、我が領土にとって、隣国となる土地を一片とて目にすることもなくなるであろう。余が、それらを悉く、一つの、汝らの領土としよう...、かくのごとく、我々に仇成すものも、しからざるものも、奴隷の枷をはめることになろう。

これはサラミスの海戦に関する2つの叙述が同じだと言っているのでは、決してない。それどころか、アイスキュロスの場合、サラミスのギリシア人たちは勝利のために一致団結しているが、ヘロドトスの場合は、対照的に、同盟の脆さを強調している。同盟諸市はこの戦いに勝つために辛うじて同じところにいるというだけだ。そうすると、ヘロドトスは、過去の出来事について、たしかに悲劇、エレゲイア詩、叙情詩の叙述を利用しているのかもしれないが、しかし、目の前の観衆を称えるという傾向は、必ずしも踏襲していないのである¹⁴。

散文史家は、韻文の音すら採用することがある。トゥキュディデスはサラミスの海戦について叙述していないが、ヘロドトスよりも遙かに『ペルシア人』の影響を受けていたのかもしれない。前413年にシュラクサイの港で行われたアテナイ・シュラクサイ間の海戦について、トゥキュディデスはサスペンスに満ちた叙述をしている（7巻71章）。海岸で対峙する両軍は、事態が進行する間、魔術にでもかかったかのごとく、状況の推移に眼を光らせている。艦隊が決定的な戦闘に敗れると、アテナイ人は恐慌に陥る。ちょうどアイスキュロスのペルシア人が、サラミスの海戦に対してみせた反応と同様である（『ペルシア人』384-432, 447-71行）¹⁵。危機的状況がさらに悪化し、敗北が明らかになると、トゥキュディデスのアテナイ人は、悲劇のペルシア人が発した慟哭(οἰμωγή)を反響する。海戦に敗れた光景に対する2つの反応はそれぞれ次のようである。

アイスキュロス『ペルシア人』426-428行におけるペルシア人：

慟哭が悲鳴とともに海原を覆っていた／夜闇の帳がとどめるまでは

トゥキュディデス『戦史』7巻71章6節におけるアテナイ人：

歩兵はもはや、違いなく、皆一律に慟哭し、悲嘆にくれ、誰もが皆、事態に耐えかねて...

¹⁴ Ch. Chiasson, "Herodotus' Use of Attic Tragedy in the Lydian *Logos*," *CIAnt* 22-1 (2003), 5-35; S. Said, "Herodotus and Tragedy," in E. J. Bakker, I. J. F. de Jong and H. van Wees (eds) *Brill's Companion to Herodotus* (Leiden, 2002), 117-47; Ch. Pelling, "Aeschylus' Persae and History," in id. (ed) *Greek Tragedy and the Historian* (Oxford 1997), 1-19.

¹⁵ J. H. Finley, Jr., "Euripides and Thucydides," in id. *Three Essays on Thucydides* (Cambridge, Mass., 1967), 47. トウキュディデスと詩的句法については、Michael Zimmとの議論に負うところが大きい。また彼には、未公開の論文"Poetic and Tragic Affinity in Thucydides' History"を拝見させていただいた。

この珍しい詩的表現は、トゥキュディデスでは僅かにこの箇所と、少し後、敗戦を受けてシュラクサイからアテナイ人が退却するときのみ用いられている（7巻75章4節）。事実、ジューン・アリソンが発見しているように、トゥキュディデスの中では、シケリア遠征の破滅的な結末を記す段に、ホメロス風の表現が最も集中している¹⁶。

韻文で用いられる単語や表現、さらには六脚韻詩形式の叙事詩と（ほぼ）同じリズムになる句、ときには悲劇の演説に見られるイアンボス調三脚韻すらも、ヘロドトスやトゥキュディデスにはよく見られる。トゥキュディデスがこうした句法を最も頻繁に使用するの、シケリア遠征とペリクレスの葬送演説、ペロポネソス戦争開戦後1年目に没した者たちを称賛する演説である——逆説的なことに、ペリクレスは、アテナイの偉大さを記録するのに「ホメロスは必要ない」と断言しているのだが（2巻41章4節）。ヘロドトスの場合、詩的な句法は、トゥキュディデスと較べれば作品全体に良く出てくるが、とりわけ戦闘の叙述、そしてその後を記す際によく用いられる。例えば、サラミスの海戦に勝利した後、スパルタ人は神託に従って、テルモピュライに散ったレオニダス王の死について、代償を支払うようクセルクセスに要求している。この時のスパルタの伝令が口にした言葉は、内容も英雄的であるばかりか、六脚韻詩に近い表現も含まれている。8巻114章はその一例である¹⁷：

「メディア人 [=ペルシア人] の王よ、スパルタのヘラクレスの一族 [=スパルタの王家] と、ラケダイモンの人々が、貴方に対して請うものは、人を殺めし罪の贖い。彼らの王、ヘラスを守り、没せしが故。」

こうした表現は、先行する特定の韻文作品に言及したものと見なすべきではないことが多く、より一般的に、著者や聴衆の多くにとっては、詩的言語の反響であったと見なされる。意図してか、無意識のうちにか、こうした定型を利用することで、英雄的、あるいは悲劇的な行動のオーラが喚起されうる。

「災厄の始まり ἀρχὴ κακῶν」という衝撃的な句は、ヘロドトスもトゥキュディデスも、決定的な危機の場面で用いている。一つは、アテナイがイオニア叛乱を支援するため20隻の艦隊を派遣した際であり（ヘロドトス5巻97章3節）、もう一つは、スパルタからの伝令が、ペロポネソス軍によるアテナイ即時攻撃を

¹⁶ J. Allison, “Homeric Allusions at the Close of Thucydides’ Sicilian Narrative,” *AJPh* 118 (1997), 499-514.

¹⁷ ヘロドトス及びトゥキュディデスに見られるホメロスの反響 resonance については、S. Hornblower, ‘Introduction,’ in id. (ed) *Greek Historiography* (Oxford, 1994), 1-72, at pp. 64-9. ヘロドトスにおけるホメロスの影響を論じた拙稿は、D. Boedeker, “Heroic Historiography: Simonides and Herodotus on Plataea,” in D. Boedeker and D. Sider (eds) *The New Simonides: Contexts of Praise and Desire* (Oxford 2001), pp. 121-4, and in “Epic Heritage and Mythical Patterns in Herodotus,” in E. J. Bakker, I. J. F. de Jong, and H. van Wees (eds) *Brill’s Companion to Herodotus*, Leiden, 2002, 97-116.

回避する条件を呈示しに来たとき、アテナイがこれを追い払った際のことである（トゥキュディデス2巻12章3節）。この句は、ホメロスがトロイアからスパルタへとパリスを運ぶ船を指して用いた表現「災厄の始まりの船νήας ἀρχεκάκους」を強く想起させる（『イリアス』5歌62-3行）。また、アキレウスがパトロクロスを遣わしてネストルに訪ねた何気ない質問「マカオンは怪我をしたのか」をも想起させる。この問いが愛する戦士にとって「災厄の始まりκακοῦ... ἀρχή」となり、パトロクロスは、絶命することとなる戦闘に加わる（『イリアス』11歌604行）。「災厄の始まり」は単に、詩的表現と言うだけではなく、歴史詩と散文で書かれた歴史の結節点でもある。どちらの場合も、この句は、歴史の不確定性を物語る際、転機を示している。すなわち、この出来事は、さらなる事態の悪化を招く、転機だったのである。

『歴史』も『戦史』も、歴史詩（とりわけ叙事詩）を想起させる言葉や韻律ばかりではなく、比喩的な語りでも彩られている。先ほど、トゥキュディデスが記すシュラクサイの絶望に陥るアテナイ人と、アイスキュロスの描くサラミスのペルシア人が、如何に類似しているかについては、既に見ている。ヘロドトスの明白な事例に目を向けてみよう。テルモピュライで勇猛果敢なスパルタ王レオニダスが戦死する。残るスパルタ勢は、遺体を保持しようと、敵対するペルシア方と奮戦する（ヘロドトス7巻224-225章）。このとき聞き手は、『イリアス』に謳われた、およそ100行近くにもわたる、アキレウスの親友パトロクロスの遺体をめぐると大々的な戦闘をきくと想起したことだろう（17歌274-368行）。

このように類似点が見られるのには、歴史詩が時間的に先行していること、あるいはそれらの詩がヘロドトス、トゥキュディデスに特別の影響を与えていたということもあるが、歴史詩と散文の歴史叙述という二つの異なるプロジェクトの間に、極めて密接な関係があるということも理由として挙げられる。最後に、とりわけ顕著だと思われる3つの要素を挙げ、本論の結論としたい。

まずは、多重音声polyvocality（ミハイル・バフチンから拝借した）——一つの視点から語られる叙述（例えば、一人の王の年代記のようなもの）とは対置される性質である。ギリシアの歴史詩の多くは（なかでも悲劇と叙事詩はとりわけ）、最初期の2人の歴史家同様、多くの声に語らせており、様々な人物の行動を追いかけている。もちろん、叙述する出来事を選択し、登場人物の語りをコントロールする作者は存在する。しかしながら、異なる複数の思考、期待、知識、動機などに焦点がシフトしているのは、過去をダイナミックなものに感じさせるのみならず、複数の視点（必ずしも全てが等しく賢明であり、賛嘆すべきものとは限らない）が考慮されなければならない、複雑な世界を呈示している。歴史詩も散文で記された歴史も、人間の紛糾は大歓迎なのである。

第二に、オープンシニンド、すなわち結末が閉じられていない点である。『イリアス』は、詩の終わりを越えて、その後にかかるアキレウスの死やトロイアの陥落まで見越している。『オデュッセイア』では、オデュッセウスが冥界で訪ねた予言者テイレシアスが、イタケ帰還後のこの英雄について、その未来を語っている。ヘロドトスもまた、叙述する事件は前479年で終わるのだが、その

後の事件についても言及しており、50年後、ペロポネソス戦争中の出来事までもが含まれている。トゥキュディデスですら、稀ではあるが、前404年のペロポネソス戦争終結後に目を向けており、例えば、終戦から5年後、前399年に亡くなったマケドニア王アルケラオスの経歴をまとめている（2巻100章2節）。これらの語りは全て、過去と未来を繋ぐ、長大な時の流れの中に出来事を位置づけている。将来の聴衆にまで、本当の意味で、我々にまで繋がっている。

このことは第3の共通項に繋がる。記憶に値するということである。過去に焦点を合わせる作者とジャンルは、それぞれの理由から、自らの努力と作品の重要性を正当化する。叙事詩は、自らが詠うところによれば、英雄たちに、不朽の名声（クレオス）を付与する。それが英雄たちの労苦を価値あるものとしているのだ。ヘロドトスは同様に、偉業がアクレア（クレオスのない状態）になり、消え去ってしまわぬよう、自らの調査を公にしているのだと、緒言に明記している（1巻1章0節）。トゥキュディデスは、過去の出来事を理解すれば、将来、同様の状況が再び生じたとき、どのようなことを想定すべきか分かるという理由から、歴史には実益があり（オーフェリマ）、永遠の財産（クテマ・エス・アイエイ）ですらあるとしている。（1巻22章4節）¹⁸。これらの声明は重要であるが、さらに加えて、詩においても、歴史叙述においても同じように、明確には知覚しがたい形で、過去は常に、警告、類比、例示のためのリポジトリとして機能している。重要であり、関係がありすぎて、忘れることができないのである。

これまで見てきた詩人や歴史家たちは、それぞれ自らの作品に明確な制作理由を付与しているが（それらは自己弁護の要素が完全でない訳ではない）、同時に、自らが描く出来事を、わざわざ念入りに記憶しやすいものとし、各々の「歴史的」文脈を離れた、さらには聴衆に与える政治的、道徳的な、実際の知識を越えた意義を付与している。叙事詩、悲劇、歴史、これらはいずれもきわめて（プラトンの意味での）ミメシスの状態を呈し、感情的反応を喚起する。トゥキュディデスの次の記述を想起されたい。アテナイの民会がミュティレネ人皆殺しを決議した翌日、同国の三段櫓船が死にもものぐるいの勢いでミュティレネ人救出に漕ぎ出したことを（3巻49章）。ヘロドトスの次の記述を想起されたい。テルモピュライの上に陣取っていた勇敢なフォキス人。オークの葉音がしたかと思うと、驚くべきことに、ペルシア軍は頂上へ向かう途を発見していた。これを見つけたときのフォキス人たちの驚きを（7巻217-8章）。また、ヘクトルの遺体をめぐる、プリアモスとアキレウスの悲痛な会談も忘れられまい（『イリアス』24歌471-691行）。各々の筋の中で一連の出来事が展開していくのだが、上述のごとき場面は、物語の文脈を越えて、人類的な重要性を有している。それらは歴史的であり、またアリストテレス的な意味で詩的なのである。

¹⁸ K. Raaflaub, "Ulterior Motives in Ancient Historiography: What Exactly, and Why?" in L. Foxhall, H.-J. Gehrke, and N. Luraghi (eds) *Intentional History: Spinning Time in Ancient Greece* (Stuttgart, 2010), 189-210 がこの点を深く論じている。